

短編ミステリー集

冬

MYSTERY
Fuyu Donari
by Otomu Shiiba

隣

椎葉乙虫

● 目次

冬隣…………… 5

思い過ぎし…………… 71

過去からの言伝…………… 127

冬隣

工期の遅れを取り戻そうと、現場監督が残業を指示して今日で三日目。定食屋には寄らずコンビニで弁当を調達して、わたしはアパートに戻った。一階の端から二番目、鍵を開け所々色の変わった扉を引いて部屋に入ろうとした時、後から男に声を掛けられた。振り向いて外灯の灯りで声の主を見ると、地味な背広姿の二人連れだった。その身なりで察しがついた。

「各務^{かがみ}さんですね、各務雄介さん」と中年の男がバッジを示した。

「お仕事から、今帰りですか、遅いですね」

九時二十分、腕時計を見ながら頷いた。

「串田千紗さん、ご存知ですよね」

その刑事はたたみかけるように言う。

「それが何か……」

遅い時間の刑事たちの訪れに、若干の不安を覚えた。

「昨夜、遺体が発見されましたね。知りませんでしたか？」

言ってる意味が、直ぐに飲み込めなかった。千紗が死んだ？ 冗談にしてはきついわ。いや刑事たちがわざわざ冗談を言いに来る訳もないか。しかも見たところ本庁と所轄の二人連れだ。殺人事件？ そう思うと言葉に詰まった。声が出なかった。

「各務さん、ひらた食堂の常連だね、毎晩のように行っているのに、串田さんの死んだことも知

らなかったのかね」

若いほうの刑事はひよろつと背が高く、中年の刑事の頭越しに顔半分を見せていた。言葉がぞんざいになっている。

「今週は帰りが遅くてね」

「マスクも騒ぎ立てているんだ、それでも知らなかったのか」

「新聞は取ってないし、今週は忙しくて寝に帰ってくるだけで、TVのニュースを見る間もなくでね。で、千紗は何時殺されたんだ？」

「十五日に遺体が発見された、殺害されたのは前の晩、十四日の月曜日だ」

「殺害場所？ 凶器は何だった？」

「質問しているのはこっちだ、あんたは答えればいいんだ。あんたはあの店には毎晩のように顔を出していたって言うじゃないか」

「そりゃあ、晩飯喰いに行きますよ。だけどおれは毎晩は行ってない、せいぜい週に三日か四日つてところだがねえ」

「そういうのを常連って言うんだよ。被害者の串田千紗とは随分親しかったようだな。あんた、彼女目当てに通っていたのか？ 自分の歳を考えてみるよ」

「言われなくても承知しているよ、娘みたいなものだから」

「変に色気を出しやがって、言い寄ったんだらう。で、被害者に拒否されて、逆上して襲ったんじゃないのか」

「そんなこたあない。言っただらう、娘みたいな関係だって、千紗の父親とは二才しか違わないんだ。店の亭主にでも聞いてみな」

「店の者からの証言でな、あんたは毎晩被害者と一緒に帰っていたそうじゃないか。彼女のハイツ付近で、あんた二人でいるところを見られているんだよ」

確かにこのところ、わたしは千紗と一緒に帰っていた。だが千紗の部屋にまで行ったことなど一度もない。

今週は月曜から残業で、その事件の晩とやらには、わたしはひらた食堂には行っていない。コンビニで弁当とビールを買って、アパートに帰ったのが九時半、シャワーを浴びてメシを喰い、十一時には寝た。その晩送れなかったことで、千紗が殺されたっていうのか。

「入り口で立ち話も何だから、チョット中に入れてくれるかな」

細身の若い方の刑事は、端から部屋に上がり込むつもりの方だった。

「疲れてるんだよ、かんべんしてくれ」

「話を聞いたら直ぐに引き上げるよ」

壁のスイッチに手をやり灯りを点けると、二人は当然のような顔で狭い三和土たきに入ってきた。

申し訳程度の流し台とガステーブルの脇を抜けて六畳間に入る。テレビと立てかけてある折り畳みのテーブル以外は何も無い。殺風景な部屋を、刑事たちは見まわしていた。

「まだ引越して間もないようですね」

中年のほう、わたしより若干若いように見える刑事が、呟くような声で言った。頭の中央の髪が殆ど枯れてしまっている、所轄の何とかと名乗っていたその刑事は、中背でやや太めだ。

「三ヶ月前だね、こつちに来たのは」

「その前はどちらに……」

「金沢だよ」

「一つ所に長くいないんですか」

「派遣会社に建設作業員として登録してあるんで、仕事があれば全国何処へでも行くさ。それでも大きなビル工事なんかだと、一年以上居ることもある。工事が終わればまた何処かに移動する、根無し草だな」

「三ヶ月前……ですか。それで夕飯を摂りに毎晩ひらた食堂に行つてたんですね」

捜査本部はひらたで常連客のリストを作成した。それでわたしの所にも聞き込みに来た、そんなところだろう。

「十四日の夜八時半から九時半、各務^{かがみ}さんは何処に居ました」

「月曜日？ 今日と同じで、八時半まで仕事、後かたづけをして九時少し前に現場を出た。で、コンビニに寄って部屋に戻った。九時半ごろだ」

「今と同じだと言うことは、正確には九時二十分。その現場と言うのはどちらですか」

「JRで二つ先のS駅前の、ビルの建設現場……」

「九時二十分、部屋に戻った。誰か証人は居ますか？」

「見ての通り一人身だし、途中で知り合いには誰にも会ってないね」

「アリバイ不確実……、とでも手帳にメモしているようだ。」

「各務さんは、串田さんとかかなり親しかつたと聞いてますが」

「店で気楽に話すていどにね。冗談を言い合ったり、それだけのことだよ」

「こちらの本庁の刑事さんが先ほど言っただように、このところ彼女が店から帰る時に一緒に店を出てましたね」

「ああ、そのことか。彼女、誰かに付けられているようで、薄気味が悪いって言うもんだから、帰りしなにハイツまで送っていたよ。方向が同じなんでね」

「ずーっとですか」

「二週間ぐらい前からだね。だが今週になつてからは中断していた」

部屋の中を見回していた本庁の刑事の甲高い声が、うしろ側から掛かってくる。

「その付け回している誰か、ストーカーをあんたは見たのかね」

「いや、おれは相手を見てない。その誰かがストーカーと言えるかどうか分からない」
「どういうことかね」

「彼女に何か言ってきたり、迫ったりしたことはなかったし、姿を見せたこともなかったようだ。彼女の思い違ひだった可能性もある」

その刑事、前に回り威圧するかのように鋭い目でわたしを睨んだ。

「いい加減なこと言ってるんじゃないのかね。ホントはあんたが彼女に気があって、一緒に帰っていたんだろう」

「また同じことを言ってる。おれは、もう五十一だよ。ご期待に添えないで残念だな」

「それは分からないね、最近じゃ歳の差がある結婚が流行っているらしいからな」

「芸能人とかセレブ連中の話だろう。我々庶民には関係ないことだ」

「そのストーカーの話、もう少し詳しく聞かせてくれないかな」

二週間ほど前、千紗が言ってきた。帰りの夜道、誰かが後を付けてくるような気がする。ふと誰かに見られているような気配を感じることが時々あって、気持ち悪いというのだ。具体的に被害はなかったが、その夜から一緒に帰るようにした。一杯飲みながらの夕食を終えて帰宅する、それを千紗の上がる八時半に合わせればいいことだから。

結局刑事たちは、わたしの話からこれと言って犯人や事件に結びつく話を得られなかった。ど
のみち、明日には工事現場でわたしのアリバイを確認するのだろう。所轄の刑事が靴を履きなが
ら、わたしに名刺を手渡した。

「何か気が付いたことがあったら、この携帯に知らせてください」

名刺には所轄署・刑事課の村井紀夫と書かれ、携帯の番号がその下にあった。

刑事たちを外に出した後、わたしは暫くその場に突っ立ったままだった。千紗が死んだ、殺さ
れた、どういう事なんだ？ 驚きよりも、その詳しい状況が知りたかった。すぐにひらたに行っ
て確かめようかとも思ったが、時刻は九時五十分だ。これから行っても店には誰もいないだろう。
わたしは逸る気持ちを抑えた。

わたしはTVのスイッチを入れた。たしか十時から民放でニュース番組があったはずだ。手早
くシャワーを浴びて、折り畳みのテーブルを出した。弁当を広げたが中冷めちやうどになっている。わた
しはビールのタブを引いて一口飲んだ。

ニュースが始まった。今日は大した出来事がなかったのか、のっけから千紗の事件を取り上げ
ていた。口の達者そうな男性キャスターが事件のあらましを伝えると、画面は現場収録に切り替
わった。千紗のマンションの遠景から場面がひらたの遠景に変わり、早口に状況を伝える女性ア

ナが出てきた。そして第一発見者の方ですと、玉代を映し出した。昼間の録画だろう、辺りは明るい。玉代は要領よく発見当時の様子を話していた。女性アナが「被害者の串田千紗さんはここに働いていたのです」と言いながらひらたに向かつて歩いていく。画面はおかみの照子との対話になった。アナの問いに答える照子は、日頃のお喋りはどこえやら、至って無愛想な口ぶりだ。千紗が真面目で大人しかったことや学費を得るために毎晩アルバイトをしていたことを、いかにも苦学生だったように言っている。そして画面は千紗の通っていた看護学校の正門付近になり、女子学生二人との対話になる。「地味な娘だったわ、皆に好かれてた」「突然の悲報に驚いたわ」ここでも千紗は良い子に収まっていた。

画面は再びスタジオに戻り、キャスターと初老の品の良い評論家とのコメントになった。「苦学を重ねながら看護師になって社会のためになると頑張っていた串田さん、全く悲惨な出来事です。犯人が憎い」とその白髪は述べていた。わたしには、千紗が何だか少し違う人物に見えてきた。評論家のおさだまりの台詞に舌打ちをしながら、わたしは報道、特に民放TVが事件を都合の良いように脚色することを思い出した。わたしが東京にいた頃に、いやな想い出が何度かある。鼻持ちならない奴らで、視聴率の事だけしか頭にない。被害者や関係者たちのことなど、まるで考えてない。可愛そうだ、悲惨な出来事だ、などと煽りたてるだけ。「はい、そこで泣きを入れて……」と指示が出されているのが目に見えるようだ、傍に台本があるように思えて仕方が

ない。

串田千紗は岐阜の山村地区から出てきて、この町の看護専門学校に通っていた。

「あたし頭が良くないから、大学には受からないって自信があったんだ」と舌を出した。でも看護師になりたかったから、高校の教師の薦めで、推薦入学で奨学金もある看護専門学校に入ったのだと話した。何のことはない大手病院の看護師育成機関なのだが、本人はそれがチョッピリ自慢のようだった。学校から少し離れたワンルームマンションで一人暮らしをしていた。夕方六時半から八時半までの二時間だけ、駅寄りにあるひらた食堂でアルバイトをしていた。そのひらたは一膳飯屋、つまり大衆食堂だ。わたしがよく夕食を摂る店で、夜は晩酌程度の酒も出している。それが最近になって客が増え、夕方から結構忙しい。定食屋だけに肴が美味く、しかも安く酒が呑める。それが不景気の御時世にピッタリはまったのだろう、近頃では空いた椅子を探すのに苦労する。さながら飾り気のない居酒屋の風情だ。

千紗が入学した当時、両親と同居する部屋を下見に来た。その時、たまたま昼を食べに入った飛騨料理「ひらた食堂」が気に入ったのだと話してくれた。他にそう言った類の店を知らなかったのだろう。田舎の味が恋しくなると寄っていたそうさ。そして店内にあった店員募集の張り紙に気が付いて、早速七月からアルバイトを始めたのは昨年のことだった。根が真面目なのか、あ

「るいは単に遊ぶ相手がいないのか、それとも金が欲しかったのか、一年と四ヶ月の間、日曜を除いて休むことがなかったようだ。働きだした頃は、化粧つけない健康丸出しの娘だったが、最近では都会生活に慣れたのか、チョッピリ可愛く変身したと評判だった。」

千紗の通夜は十七日木曜の七時からだった。その日は少し早めに仕事場を出て、ひらたに向かった。休業の札が下がっているガラス戸を引くと、がらんとした店内に玉代がぼつんと座っていた。

「あら各務さんもこれから通夜？」

「ちよつと早いから寄ってみただ」

「今お茶入れるわね」

そうしているうちに二階から亭主夫婦が降りて来て、四人で店を出た。会場までの道々、玉代は発見当時の様子を話してくれた。

十五日の夜のことだ。店を休んだことのない千紗が、その日は連絡もなしに出勤しなかった。初めのうちは少々ご立腹だったおかみの照子も、時間が経つにつれ心配に変わっていた。

「電話にもでないのよ、具合が悪くて動けなくなっているのかも知れない、帰りに見てやって」
パートの店員の飯島玉代は、そう言われた。

仕事を終えた玉代は九時半に店を出ると、自転車で千紗のハイツに向かった。